

Title	十八世紀英國産業革命史論(アーノルド・トインビー著, 芝野十郎譯)
Sub Title	
Author	山口, 昌(Yamaguchi, Akira)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.1 (1926. 3) ,p.151- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260300-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

十八英國産業革命史論(アーノルド・トインビー著) 芝野十郎譯

一個の學者たるに止まらず、兼りて又社會改良事業の實行者として、將又社會主義にも賛せず、極端なる個人主義にも同ぜずして、自由意志に基く組合の主義を信奉して居つたアーノルド・トインビーは、短命僅かに卅一才にて逝つたが、彼の遺稿は、彼の未亡人及び友人の手によりて編集せられ、題して「英國産業革命講義」といふ。本書は一八八四年に刊行せられ、今、芝野十郎氏により一九二〇年第六版による全譯を手にするを得たのは、經濟學史研究者、經濟史、社會政策等を攻究する者にとつても欣幸すべき事である。

本書は、ミルナー卿の追憶によつて巻を初め、トインビーの生涯を窺知し得られる。而して産業革命の内容は、全篇を十四章に分ち、更にリカードと舊派經濟學、通俗講演集(一)貨銀と自然法則、(二)産業と民主主義、(三)急進論者は社會主義者なりや、その他、組合員の教育、國家と教會との理想的關係、労働者に與ふるリーフレット(其の一)——教會と民衆、雜録の法論文を記載されてゐる。

産業革命第一章序説にトインビーの説けるは、史學家の首肯しうべき幾多の點を發見する。仍ち「歴史も亦經濟學と關聯して研究せらるゝ時、より良く理解せられるのである。蓋し後者は、吾々が歴史を繙讀するに際して、適當なる事實を採擇することを教ふるのみならず、更に例へば圖込及び機械の採用に伴ふ多くの現

象、或は通貨に關する諸制度の影響等の説明を可能ならしむるものであつて、經濟學の援助がなければ是等のこと依然として不可解であらう。經濟學の教ふる精緻なる演繹的推理も亦歴史家にとつて重要なものである」と。又歴史が民衆の狀態に關聯せる死括問題を看過するといふ事は古からの苦情であると云つてゐる。

第二章一七六〇年の英國(人口)第三章一七六〇年の英國(農業)第四章一七六〇年の英國(製造工業と商業)に於て各々該博な文獻によつて説明せられ、第五章一七六〇年の英國(郷土の衰微)に於ては、トインビー自身による手記といはれ、法制上、經濟學上の見地よりして、詳細な郷土制度に趣く原因、結果を考察し、郷土消滅の經濟的諸原因は比較的重要ななかつたとは云ひ乍ら、それ等は此の變革を促進するに與つて力があつたといつてゐる。

第六章一七六〇年の英國(貨銀労働者の狀態)にては此の世紀初頭以降に於ける境遇の改善、貨銀の不平等、職人の地位等を述べ第七章重商主義とアダムスミスに於ては、労働の移動に對する諸制限、官憲によつて貨銀及び物價を決定することを説き、又重商主義の基礎たる理論として、若し一國が貿易に依つて利益を教めたとすれば、それはその隣國の損失に於てさうするのであると思はれたと云ふ。アダムスミスの根本思想として最初に世界主義を次に個人的利己心に對する彼の完全にして動かざる信頼を擧げてゐる。

第八章産業革命の特徴は急激な人口の増加、農業革命、工場制度、商業の發展、地代の勝算等を指宗し、第九章貧窮の増加にては、救貧法の沿革を述べて、更に貧窮増加の原因としては、農

の合併、圍込、物價騰貴、機械の採用を擧げてゐる。

第十章マルサスと人口法則について、彼はマルサスの救済策を救貧法の廢止、道德的抑制とし、眞の救済策は、労働者の住居の改善、より長き教育、より長き娯樂といふが如き社會改良の大方策を講じ、彼等を向上せしむることであると論じてゐる。第十一章、貸銀基金論にてマルサスの貸銀基金論の批判をなし、英國及び歐洲大陸に於ける貸銀の比較より、一七九〇年乃至一八二〇年に於ける貸銀の下落にまで説明してゐる。第十二章、リカルドと地代の騰貴に於ては、「リカルドは甚だ單純なる論據より産業的進歩に關する有名な一法則を演繹した。進歩的社會に於ては、地代は騰貴し、利潤は下落し、貸銀は殆ど同一點に靜止するに相違ない」と彼は云ふ、吾々は此の法則が眞實であり、正當に適用し得ることを、實際の事實から發見するであらう、乍然、それは普遍的法則として承認せられ得ない」と云ひ、而して「歴史的研究法とは、經濟史の過程の實際的觀察から、經濟的進歩に關する諸法則の推論を意味する。而して此の研究法は、推論の結果を吟味する點に於て、最も有益であるけれども、その不完全なる概論を提唱する傾向の故に、それ自體は危險に充ちてゐる」と述べてゐる。更に彼は農業的地代學說の考察する都會に於ける敷地賃賃料に就き論を進めてゐる。

第十三章、ニツの經濟的進歩論では、貸銀は靜止し利子は低落するであらうといふリカルドの説は事實が兩命題を反駁し、又ヘンリー、ザモーンツの經濟的進歩論も同じく事實と矛盾せるを説く。第十四章労働者階級の將來に於ては、労働者階級の道德的進歩、勞

資關係の改善、産業的共同經營、共產主義、修正社會主義を述べ、最後に「現實の問題は、労働者の境遇に於て幾分の改善を達成すべきかではなく、完全なる物質的獨立を如何にして確保すべきかであることを、吾々は記憶せねばならぬ」と云つて章を結んでゐる。リカルドと舊派經濟學の論説は經濟學說研究の士にとつても十分の満足を得るものと思ふ。

更に通俗講演集は、勞資兩階級の聽衆に對して、勞資關係に影響する諸問題を論議したものであり、最後の雜録は、種々の場所時々於て彼の心に浮べる儘のものを飾したもので、よく彼自身を眞實に表示しが味あるものである。本書の譯はいさゝか逐字譯にすぎたると、曩に譯出されるものよりも更に平易に譯述されてゐる。尙原書頁數を指示されあるも譯者の勞を多とし、本書を敢へて推奨するに十分なることを信ずるのである。

(一九二六・二・二六山口昌)

ブルツク英文學史(石井誠譯)

(東光閣發行)

從來わが國と政治的に最も親交があり、政治經濟においてわが國人の範として、仰いだ英國に對してわが國人はどれだけの理解を有するであらうか、現在中等學校以上の語學においては最も多くの時間と努力とを英語に費し、政府發行の紙幣から民間の商標に至るまで、或は汽車の切符から街頭の看板及び廣告に至るまで馬鹿げたほど英語を濫用しながら、わが國人は英文學に對してどれだけの理解があるであらうか。語學研究と文學研究とは必ずし